

## 近藤さん(近藤教授のこと)

著者	谷川 徹三
雑誌名	日本文学誌要
巻	7
ページ	31-32
発行年	1961-12-30
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10114/00019039">http://hdl.handle.net/10114/00019039</a>

だ。紹介されて四方山の話に花を咲かせている中、桃割れの女性が現れた。甘才前だ。初々しい愛嬌のある顔立で、利巧そうな眼許をしている。いきなり近藤君の傍へ坐つて、

「どうして来てくれなかったんです」

と怨む。友人君は待つてましたと許りで、ニコニコしてる。何でも、友人君は、家がよくて、東京へ来てる間に、家からの小使で、近藤君を誘う中に、この女性を発見した。彼女は友人君よりも、近藤君のうぶな所を好いたのらしい。通人たる友人君は、寧ろそれを肴にしているという様な順序らしい。近藤君としても嫌な相手ではなかった。さればといつて、度々呼ぶ程、資力がある訳はない。何でも、臨時の原稿料が入った時などに、日頃お母さんとの白眼めっこ、ムニャムニャいうだけのことで、その時は、友人君が適当な助け舟を出していた。僕の方は、態よく当てられた様なものだった。

まだ若いこの妓は芸も大して出来なかったのだろう。近藤君が、僕をもてなす意味か、清元を一くさりやったが、夫は自身の口三味線だった。僕の印象では、夫までに相当稽古は積んでたろうとにらんだ。そのあと友人君が、次から次と短かいものを出してた。僕は芸なしで、唯ありがたく酒だけ呑んでいた。こんなことが、二三度あった。いつも同じ顔振れだった。又いつもこの程度で、二三時間でさらりと引上げるのだ。——尤も、僕を外してる場合だって無くはなかったろうが、そこまで邪推を廻さぬ方がきれい事だ。

それから二年程経ったある日のこと。近藤君の案内をうけて、芝の赤羽橋の傍のさる料亭に入った。小粋な玄関だが、相当の家だった。女中に何とか話をしていたが、大丸髷のお神が姿を見せた。顔

を見てハット驚いた。池の端で会った、かの女性なんだ。説明を聞くと、当時東京で有名な、さる料亭の主人に眼をつけられて、お酌のままで引かされたのだそう。而してここに店を持たされたのだという。恐らくは開店してからお神の方から案内したのだろう。既に何度かの逢う瀬があったに違いない。この時は、かの友人君は居なかったが、近藤君は口数が少く、時々思い出した様に、お神と何かを話してるだけだ。どこが嬉しいのか、と聞きたい位だった。だが御兩人は結構嬉しかったのだろう。こういう席でも、近藤君という人はきれいな人だった。近藤君の思想研究も結局はこの人柄から出たのだと思う。

## 近藤さん

谷川 徹三

ヴァレリの「ドガについて」の中に「ドガとフランス革命」という一章があるが、その中の一挿話は、私に忘れがたいものとなっている。

一九〇四年七月二八日に、ドガは私に次のような昔の思い出を語った。

彼が四つか五つの時、彼の母は或る日彼を連れて、ル・バ夫人を訪問した。夫人は、ロベスピエールの親友で一七九四年の政変に際してピストルで自殺したあの有名な国会議員ジョゼフ・ル・バの妻

で、その息子フィリップも名高い学者であり、ドガの叔父達を教えたことがあったのだった。

この老女はトゥルノン街に住んでいて、ドガはその蠟を引いた市松模様の床の赤い部分をまだ覚えていと言った。

訪問が終って、ドガ夫人は彼女の息子を片手に引きながら玄関まで来ると、彼女はそこ廊下の壁にロベスピエールやサン・ジュストやクルトンの肖像画が掛けてあるのに気が付いた。

「何ということでしょう」と彼女はル・バ夫人に言った。「あなたはまだあの鬼達の肖像を取ってお置きになるのですか。」

「お黙りなさい、セレスティース」とル・バ夫人が答えた。「あの方達は聖者でした。」

近藤さんのことを書けと言われて、何ということなしに私はこの話を思出した。全くの偶然で、何の理由もないことであつたのかも知れない。偶然としてもいささか突飛な連想のようにも思える。しかしたって理由を探せばないこともないので、それは一時期私がしばしば学校で近藤さんの行動の弁護をしなければならぬ立場に立たされたからである。近藤さんの行動に賛成できなかった場合にも、私はその動機の純粹を常に信じ、また近藤さんの人柄の純真を常に信じていた。そういう記憶が私に甦つたということがあるかも知れない。

その頃近藤さんと初めて懇談したあとで、時の大内総長は私に言った。「近藤さんて実に深刻な顔をしていますね。」これはその時の近藤さんの表情の固さではあるまい。そういう風には私には全然とれなかった。文字通り、内面の表現としての顔貌についての印象を

語つたものであろう。しかし私にはそれまでその近藤さんの顔を特別に深刻な顔と思つたことはなかつたので、ただ「そうですね」とだけ答えたのだが、私はそう答えながら、なるほどそう見えるかも知れないと、改めて近藤さんの顔を思い浮べてみたことであつた。

近藤さんの顔は私には時に能面を思わせ、時に写楽の役者絵を思わせる。写楽は能役者でもあり、その役者絵には能面の様式化の影響が見られそうだから、私のこの場合の連想にはつながるなほないようだ。木に刻んだような静かな固さ。それはいつも何かを思いつめている人の顔で、こういうところが大内さんに、深刻な顔と思わせたのであろう。ところが、その顔が笑うと、実に無邪気になるのである。子供の明るい無邪気ではないが、女性的な優しさをもち、これをやはり無邪気というより言いようのない、澄んだものをそれは感じさせる。

(掲載順序は到着順にした)  
がいました。——編集部